

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 タチウオ

学名 *Trichiurus japonicus*

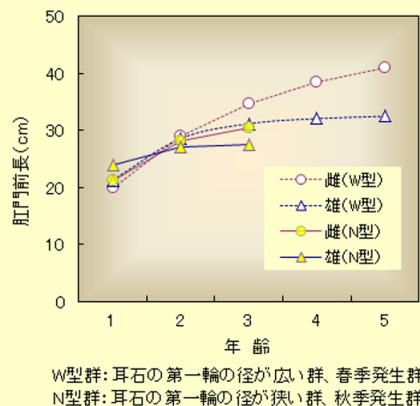
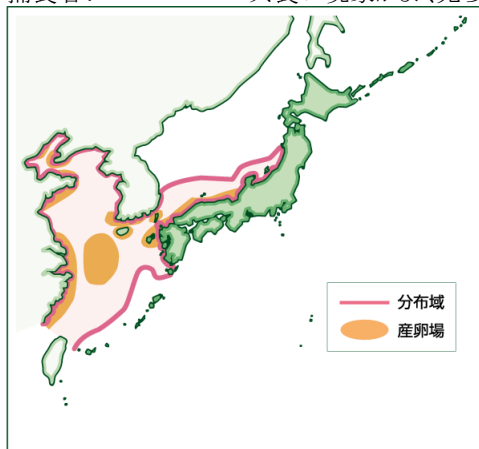
系群名 日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 8歳
成熟開始年齢: 1歳(40%)、2歳(80%)、3歳(100%)
産卵期・産卵場: 春～秋季、九州西方(東シナ海)、盛期は春季で秋季まで産卵が継続、主に黄海・渤海を含めた中国沿岸、我が国沿岸でも産卵
索餌期・索餌場: 不明
食性: 主に小型個体(肛門前長200mm以下)は小型甲殻類、中・大型個体は小型魚類
捕食者: 共食い現象がよく見られる

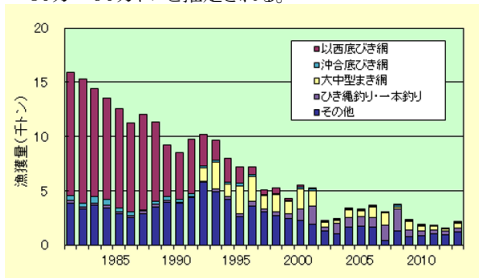


漁業の特徴

かつて我が国の漁獲量の7～8割を以西底びき網漁業(以西)が占めていたが、現在、以西の漁獲量はピーク時の0.1%以下となった。沖合底びき漁業(沖底)による漁獲量も著しく減少した。タチウオに対する近年の我が国の主な漁業は、まき網やひき縄釣り漁業である。また日韓暫定水域を除く我が国EEZにおいて、韓国は我が国に匹敵する量を漁獲している。本系群全体を見ると、主に中国が底びき網、あんこう網などで漁獲している。

漁獲の動向

我が国の漁獲量は減少を続けており、2013年には0.21万トンとなった。韓国の漁獲量は1983年に15万トンであったが、1996年以降3万～8万トン前後で推移しており、2013年は4.7万トン(うち0.15万トンは日韓暫定水域を除く我が国EEZにおける漁獲)であった。近年中国は全国で100万トン以上を漁獲しており、うち本系群の漁獲量は2011年には80万～90万トンと推定される。



資源評価法

資源水準と動向の判断には以西(2そうびき)および沖底(2そうびき)のCPUEと資源密度指数を用いた。以西については、1966年から最新年まで操業が継続している農林漁区(標本農林漁区)におけるCPUEを過去に遡って求めた。東シナ海域における着底トロールによる現存量推定値も参考とした。近年の沖合域での資源動向の判断には、日韓暫定水域を除く我が国EEZで操業する韓国延縄漁業のCPUEも参考とした。

資源状態

以西(2そうびき)全体および沖底(2そうびき)のCPUE・資源密度指数および標本農林漁区のCPUEは低位で、調査船調査による現存量推定値からも水準回復は見られないことから、我が国EEZの資源水準を低位と判断する。直近5年間では、以西(2そうびき)の標本農林漁区でのCPUEは横ばい、沖底(2そうびき)のCPUE・資源密度指数は減少傾向、以西(2そうびき)全体のCPUEと資源密度指数、調査船調査による現存量推定値、日韓暫定水域を除く我が国EEZで操業する韓国延縄漁業のCPUEの4指標値はほぼ横ばいのため、動向を横ばいと判断した。



管理方策

近年、日中韓三国の漁獲量は合計100万トン以上で推移しているが、本系群全体については資源水準・動向の指標値が存在しないため、現在の資源水準について関係国間で見解が一致していない。このため抜本的な資源管理方策が行われていないのが現状であり、早急に関係国が共有可能な客観的手法による資源判断基準を作る必要がある。

る。一方、我が国EEZにおける資源は長期にわたり低位水準にある。漁獲量を現在の漁獲動向のものより下げること
で、我が国周辺海域に来遊した資源を適切に利用し、かつ我が国周辺海域で再生産を行う親魚を保護することを直
近の目標とする。

	2015年ABC	管理基準	F 値	漁獲割合
ABClimit	24百トン	$0.7 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.00$	—	—
ABCtarget	20百トン	$0.8 \cdot 0.7 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot 1.00$	—	—

- ただし、我が国の漁獲と日韓暫定水域を除く我が国EEZにおける韓国の漁獲に対する値
- 日韓暫定水域を除く我が国EEZにおける韓国延縄漁業のCPUEについては、長期の数値の蓄積がないこと、および漁具・漁法の詳細が不明であることから、ABC算定の根拠となる資源量指標値には用いられない。以上を鑑み、ABC算定規則2－2)によって、ABCは $\text{ABClimit} = \delta_2 \cdot \text{Cave} \cdot \gamma_2$ 、 $\text{ABCtarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$ で計算した
- γ_2 は、 $\gamma_2 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の0.5)、bとlは漁獲量の傾きと平均値(直近3年間)である
- δ_2 は低位水準かつ漁獲量に平均値を用いた場合の標準値(0.7)を使用した

資源評価のまとめ

- 我が国EEZの本系群の資源の水準は低位にあつて、動向は横ばいである
- 日韓暫定水域を除く我が国EEZでの韓国の漁獲量は我が国の漁獲量に匹敵しており、我が国EEZの資源に与える影響を注視する必要がある
- 本系群全体の評価は現時点では困難であるが、関係国が共有可能な資源判断基準が必要

管理方策のまとめ

- 漁獲圧の削減により、我が国周辺海域への来遊資源の管理と、我が国周辺海域で再生産を行う産卵親魚の増大を図る
- 我が国EEZでは、我が国の漁業による漁獲を管理するとともに、現在我が国と同程度の漁獲量を占める韓国漁船の操業も適切に管理する
- 関係各国との連携により、本資源への漁獲圧の低減が必要

執筆者: 青沼佳方・酒井 猛

資源評価は毎年更新されます。